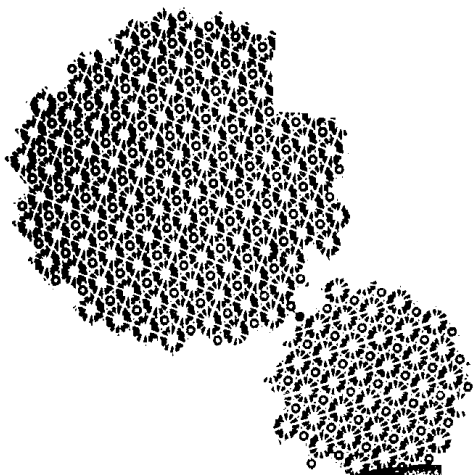


むな
胸さわぎ

早乙女勝元



大和書房

むな
胸 さ わ ぎ

銀河選書(5)

一九六五年 六月二五日 初版発行
一九六六年 六月一五日 第八刷

定価 三二〇円

著 者 早 乙 女 勝 元

発 行 者 大 和 岩 雄

発 行 所

大^{だい}和^わ書 房

東京都文京区関口町一

振替 東京 六四二二七

電話(二〇三)四五一一四

製版・印刷・東洋印刷 製本・誠幸堂

落丁本・乱丁本はお取替えします

〈検印を略す〉

© 1965

胸^{むね}さわぎ

1 五円の寄付

5

2 ダムの町にて

63

3 鬼娘

109

4 青い貝ボタン

163

白夜と森と湖の国へ

181

早乙女勝元のフェスティバルの旅から

見返し写真
さし絵
装幀

安久上
念米口
宏睦
勉一人

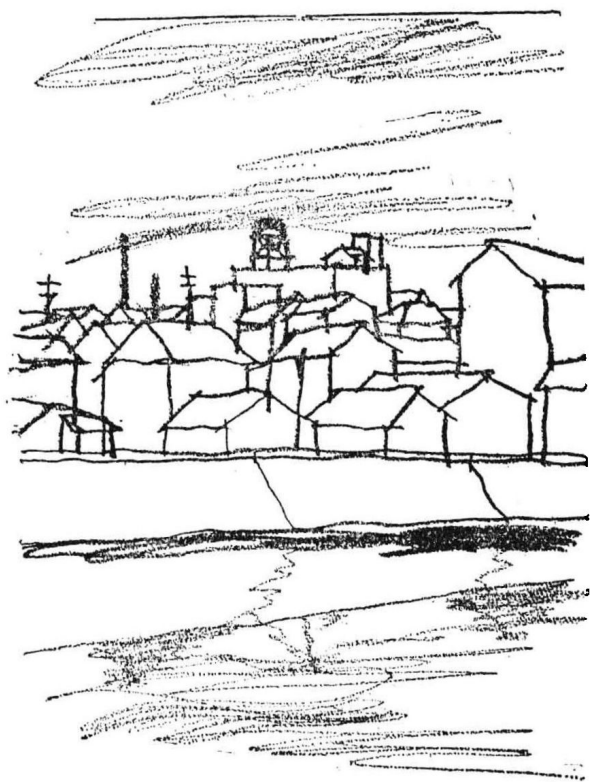
胸むね

さ

わ

ぎ

1
五円
の
寄
付



このごろのおれときたら、どうしたわけだろう。

道を歩いていても、乗物にのつても、なにか落しものでもしたようにおちつかない。といつて、いつもいつも、足もとばかりをさぐっているのではない。おれの視線の一直線に吸いついていくところは——娘だ。花びらのような娘だ。一日に一度、どこかのステキな娘を見ないことには、おれの胸はみたされぬ。疲れもぬけない。酒をのんでも気分は晴れぬし、めしを食つても、ざらざらと砂をかむように味気ない。

なんだって、そんなに娘に執着するのかと不審に思う人には、娘という字を、もう一度とつぷりと見なおしてもらおう。

女ヘンに良と書いて娘とよぶ。つまり、女の一番よいときが娘で、女に家がつけば嫁、古くなれば姑、波がよつて顔にシワができれば婆（ババア）とは、よくいったものだ。家がついたり、古くなったり、波がよつたりした女性には、さしあたりおれにはエンがない。

なぜなら、おれは、まだ二十一才。男の一番よいときとはいえぬが、ファイトもスタミナも身体中にいっぱいだ。そして、おれはちっぽけな工場の旋盤工。あまり自慢できる職業ではないかもしれないが、すくなくとも、花びらの一枚だけは獲得する権利があるというものだろう。

だから、朝と夕の通勤電車で、ステキな娘を見つけると、おれは、かすかな安らぎをおぼえる。ああ、よかったと思う。おれと未来をともにするかもしれぬ娘が、ここにもいたというわけだ。

「はじめまして」

おれは、口もとまで出かかった挨拶をおさえて、そっと彼女に近よる。

1 五円の寄付

ラッシュの力関係を応用して、さりげなく彼女の黒髪のはしにふれてみる。痴漢？ 冗談じゃない。さしあたっての友好のしるし、人間みな兄弟のささやかな挨拶だ。

だが、そこまでである。

それ以上はいけない。おれにも、ブライドというものがあるらしくて、娘がきつとこちらをふりかえって金切声を上げたら……と思っただけでも、息がつまり胸がすくむ。

「あの……友だちになってもえませんか？」

ほんとは、卒直に、そうきりだしてみたいところなのだ。

しかし、これはおそろしく勇気のいることだし、おまけに友だちのトの音が、いやに発音しくいとできている。ト音は、のどもとまで出かかって、咽頭^{のど}にガムみたいにひつつき、そこから離れることなく、ついには息のねまでとめようとする。

「と、と……」

と、おれは、あせて口ごもる。

そうして、ト音もろとも生つばと一緒にのみこんだ経験も、これまでのうちに何回あったことだろう。すくなくとも、一度や二度のことではなかったように思われる。

ところが、その日そのときにかぎって、おれは、ト音のかわりに、ア音をみじかくはじきとばしたんだ。

——夜だった。

おれは、三時間の残業をおえて、ほろくずのように疲れはてた身体を、かろうじて私鉄の通勤電



Home

車の吊りかわでささえていた。左手で額をぬぐうと、なにやらぬるっとした感触があった。指先に黒くしみついたものは、汗ではない。疲労が脂のように、じっとりと顔面にまでにじみだしているのだ。

おれは、ヤケクソに、その指先をぐいとズボンの尻になすりつけて、また、吊りかわへ手をのびした。

ぎよつとして、その手をひいた。

吊りかわには、すでに別の手があって、おれは吊り輪のかわりに、もろにその手をつかんでしまったのだ。

それは、かすかにしめりけのある、しなやかな指だった。まっすぐにのびしたら、弓なりにしなあって、小さなえくぼさえ見えるような指だった。

おれの胸は、はげしく高鳴った。

すばやく目の玉だけを移動させて見れば、おれのすぐとなり、水色のブラウスの肩に、ピロッド

1 五円の寄付

のような黒い髪がある。小麦色にはずんだ頬には、つぶらな目がまっくろに光って、そこだけ墨をぼかしたようにあざやかだった。この娘、いつのまに、おれのとなりへきたんだらう。手をつかんでしまったのに、彼女はまったくそしらぬ顔で、暗い窓の一点に目をすえている。

おれは、生きかえったような興奮を感じた。

かっと、頬がほてってきて、身体中のありとあらゆる血が彼女のほうへかたよっていくように思ひ、重心がはずれては困るのであわてて両足をふみしめた。

手をつかんだときに、やあ失礼とでも声をかける機会があったわけだが、惜しいことをしたと思う。唯一のチャンスは、すでに手のとどかぬ過去へ遠のいてしまった。では、もう一度吊りかわへ手をのばすか。いやいや、そんなゆとりはない。電車はがくんととまって、もう、おれのおりるT駅へきてしまった。

一瞬、氣をとられたので、おれは電車をおりるタイミングをはずし、人なみをかきわけ、おしめて、無我夢中でホームへとびだした。おれの身体が、電車からすっぽりとはじきだされたように、ドアが自動的にしまった。やれやれと胸をなでおろしたとき、背後に人のけはいがある。

さては、おれよりのんびりしたやつもいるのかと、おどろきあきれ、うしろをふりかえったら、それが意外にも、さっきの彼女だった。

電車のドアのほうへむいて、背をかかめている。なにをしているのだらう。うっかりおりてしまったものの、それは自分の下車駅ではなく、もう一度ドアをあけて乗りこもうといったけいはいである。おれは、まゆをよせた。発車のベルが鳴り、やがて電車が動きだした。

すると、彼女のスカートが、ぱあっと日傘のようにひろがったのである。

「あっ！」

おれは、ことの重大さに息をのんだ。

電車のドアに、スカートをはさんだのだ！ 彼女は背をまげ、手をのぼし、けんめいにスカートのはしをひきはがそうとしたが、ドアは、布地の一端をくわえて離さず、電車はゆるやかに動きだす。

それでも、なおスカートははずれない。

電車の動きにつられて、彼女は小走りにホームを走りだした。やむにやまれぬ動きだった。電車が速力を増して、娘がホームに転倒したら……おれは、恐怖のあまり、石のように硬直した。

が、つぎの瞬間、おれの足はホームをけって、弾丸のような勢いで彼女のそばへ突進していた。

ホームには、まばらに人影があったから、この危険を目撃した者はおれだけではないはずだったが、とっさの出来事なので、みな棒だちにすくんでしまったまま声もない。

畜生、だれか車掌へ通報してくれればいいものをといらだちながら、おれは娘と一体になって、電車と平行にホームを走った。小走りに、たたたた……と走った。走りながらおれは、彼女の手ののびるところへ、自分の左手をのぼした。そこに最大限につっぱったスカートの布地の一端があった。デニムのようにかたい布地だ。これでは、かんとんに切れるわけがない。

電車は、さらに速力を増していた。

1 五円の寄付

これ以上スピードが加われば、もうダメだ。今だ、今というこの瞬間をのぞいては……
「くそっ！」

おれは、背後からかかえこむようにして彼女の上体をささえ、左手で、ぎゅぐゅとスカートの布地をつかんだ。

たしかに、つかんだ。

娘の足が白くもつれ、荒い息が耳たぶをかすめる。目からばちばちと火花がとぶ。目がくらみ、地がゆれる。もうれつなタックル。タックルにタックル。おれは左手の指先に満身の力をこめて、その手を思いきりぐいと引いた。

「あー」

とたんに、娘の身体はドアから離れて、軽く一、二間もはじけとんだ。

ゴムマリのようだった。おれは、いやというほどホームの支柱に肩を打って、そして、ぶかっこのうな姿で、尻持ちをついてしまった。

電車は、急停車した。

ぶしゅつと、サイダーの栓でもぬいたような圧縮音とともに停止した。

見れば、一輛車のなかほどまでが、ホームのへりからみごとに突きだしている。よかった。危機一発とはこのことだろう。おれのタックルがもう一足おそかったら、彼女はホームに転倒し、ひきずられたまま、線路の上へころげおちたにちがいない。おれは、ふうつと、口から棒のような息をはいて、おもむろに腰をあげた。

ホームは、人なみで大きくゆらいている。

娘はと目をこらせば、人間の渦の中心にもまれながら、駅員の手にささえられていくところだ。人間の渦が改札口へと移動していくので、それとわかる。彼女は今のショックで、貧血でもおこしたのだろうか。無理もない。恐怖のほかに、娘のはじらいというのだってあるだろう。野次馬たちがよってたかって、その後を追いつがっていくのを見ると、おれは急にげんなりとしてしまつて、娘を追うのをあきらめ、やれやれとズボンの尻をはたいた。

いいことをしたような半面、自分だけとりのこされたようなさびしさを感じたのは、もちろんのことである。

ふいと、おれは目を見はった。

足もとのホームに、なにやら、ぼつんと光る一点がある。水銀灯の明りをチカチカとはねかえすところへ手をのばしてみると、それは小さな貝ボタンだった。

直径一センチほどの丸いかざりボタンは、蝶貝でもできているのか、青白く透明な光沢が、星のカケラのように美しかった。今のどさくさで、娘の着ていたものからもぎれてとんだのだろう。

残りものには福がある！

おれはつぶやき、それを手にしたまま、ホームを歩いて改札口へとむかった。娘にかえすつもりものが、改札口まできたら、その意志をなくした。

「君たちには用がない！」

駅員室の入口で、野次馬たちが駅員からどなられている。

1 五円の寄付

「スカートをきれたんだ」

雑踏のなかのざわめき。

「それで、たすかったってわけか」

「ヒヤヒヤ」

「おめえ、そこんとこ見たか？」

「見たとも」

「ちよ、うまくやりやがって」

「さっと、スカートをぬいちまえば、こんなことにはならなかったんだ」

「ばか。ストリップじゃねえぞ」

おれは、ざわめきの背後を通りぬけて、ふんと鼻を鳴らした。駅員にかわって、ひとこと投げつけてやりたくなったんだ。——君たちには関係ない！と。

むしろ関係があったというならば、それは、どのだれでもない。おれだ、このおれをのぞいてほかにはいない。とっさの出来事で、だれもおれの存在を忘れ、かんじんの彼女さえ、おれの顔をおぼえているとはいえないのだが、しかし、おれのほうは決して忘れはしない。髪の色から、あのしなやかな指先まで、くつきりと目のなかにやきつけてある。

それに、この貝ボタンだ。もしも、こんど彼女とあうときがあるとすれば、このボタンが、おれの男らしさを証明してあまりあることだろう。

娘は、どのだれやら名前もわからぬが、この時間にこの駅でおりたとすれば、おそらくこの町

のどこかに住んでいるのだろう。私鉄のT駅を下車駅とする町は、それほどひろくはない。ひよつとすると、明日にでもふたたび会える機会がやってくるかもしれない。明日にでも！

そう考えると、おれは、胸にはちぎれる思いをもてあました。

ボタンの一個に彼女の心がこめられているかのように、おれはぎゅぐゅと手のひらが汗ばむほど彼女の記念品をにぎりしめ、明日という日に手をかけて、ぐいところらに引きよせたい衝動を感じたものである。

おれは、いくらかそり身になって、足よりも軽く、駅から家にむかう道を歩いた。歩きながら、明日よこい、早くこいと、子どもの歌を勝手に作りかえて唇にくちずさんだりした。このごろのおれにしては、めずらしくさわやかな気色だった。疲れも、ふつとんだ。おれの歩く町は、熊野神社の大祭が近づいてきたとかで、黒い屋根のかさなりのあいまから、早くも笛と太鼓の音が流れてくる。

あれは、ナマのおはやしではない。テープだ。町の顔役が、町内会の御酒所にマイクをすえつけ、録音テープをかけっぱなしにして、いまからまつりの気分をあおっているのだ。といって、まつりの費用は、どこからも出はしない。すべて、一般町民の寄付によってまかなわれる。そうすると、あのおはやしも、寄付がねらいの前奏曲といえないこともないが、今夜ばかりはなぜか妙にさえええと胸にしみる。

「よう」

と、肩をたたかれなかったら、このころよさは長く尾をひいて、ずっと家までつづいたことだ